（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	マリア ルシア コレア Maria Lucia Correa
論文題目	MISHIMA YUKIO OR A LITERATURE OF THE ACT —A PSYCHOANALYTIC READING— （三島由紀夫或いは行為の文学—ひとつの精神分析的読解—）		

（論文内容の要旨）

本論文は、近代日本の作家である三島由紀夫が行為の問題に如何に取り組んだかについて、彼の諸作品中におけるその多面的出現に焦点を当てながら、精神分析的視点によってそれを再構築しようとする試みである。衝撃的な自殺という最後の行為によってとりわけよく知られる三島には、作家活動の開始から、行為の問題への関心が見られる。

第一章ではまず、三島由紀夫の生涯を紹介しながら、自伝的な検討に現れやすい方法論的な困難点について述べられている。そこでとりわけ、三島という筆名の使用について語られる。次に、精神分析と文学の関わりの特徴や歴史的な事項を紹介しながら、何故に精神分析的読解が有益であるかを方法論的に説明している。最後に、本論文の発見的な仮説として、三島作品における「行為」の重要性が扱われている。

第二章では『金閣寺』を取り上げて、父の機能の失敗と放火行為との関係が考察される。まず、実際の事件と三島の小説との間の相違が調べてあり、小説に繰り返し登場する父親的人物たちの存在を指摘しつつ、小説の筋が紹介される。続いて、精神分析理論における父の概念を検討し、父を人としてではなく機能に関わるものとして理解すべき理由が明示される。その後、ラカンの父の名という概念が、二つの理論的観点から検討される。すなわち、エディプスコンプレクスと、現実界・想像界・象徴界の三領域の二つである。これら三つの領域が父の三つの現れ方をも決定していることに注目し、またさらに原光景に関する精神分析の考え方が小説の場面と比較され吟味される。精神分析理論から取り出したこれらの要素の全てが、この小説のテクストを、失敗した父の機能という観点から再構築することに役立てられている。この点について詳しく説明した後、最後に、この小説は、現実の事件とは違い、放火犯人の狂気への道を描写したのではなく、むしろ、行為へ向かうことのうちで、主人公が「生」へと接近する可能性を獲得したことを示そうとしているものと結論する。

第三章では、行為の問題に接近するために、三島の文学に繰り返して現れるある要素が抽出されている。それは、認識と行為の二項対立である。この二面性が三島の文学全体を通じて幾つかの変奏を伴って現れているとされる。この観点から、四つの河の隠喩が紹介される。三島が彼の人生と作品の理解の鍵として選んだ四つの要素（行動、肉体、書物、舞台）のうち、最初の二つが強調される。次に、『太陽と鉄』での

三島の身体の扱いのうちに見られる三つの運動を、作業仮説として提示される。エクリチュールへ向かう運動、ボディビルへ向かう運動、そして自殺という過激な運動である。これらの運動を扱う前に、三島において言葉と身体の関係がどのように精神分析の視点から理解されるかについて、鏡像段階というラカンの理論を通じての検討がなされる。最終的に、最初の二つの運動について、精神分析における「アクティングアウト」の概念の観点から、そして三つ目の運動を「行為への移行」の概念から解釈を試みている。結論として、三つ目の運動に見られるパフォーマンス的要素は、これを根本的行為とみなすことに抵抗する部分であることを確認し、三島文学における舞台の要素という問題への道がそこで開けていることを見る。

第四章は、上に述べた舞台的要素を扱っている。これは三島が、「舞台」という題目で、四つの鍵要素の一つとして導入していた要素である。まず三島の舞台に対する二重の関係を紹介する（劇作家として、かつ俳優として）。そして舞台が三島にとって常に持っていた重要性を強調する。次に、精神分析の視点から、まずは「世界」、「舞台」、「舞台上の舞台」のカテゴリーを取り上げ、それぞれの間で確立される関係がどのようなものかを考察する。続いて、フロイト的観点から、夢の舞台に言及し、夢と舞台の双方において現実性はいかに把握されるのかという問いに取り組んでいる。現実性と幻想の二重性に精神分析的にアプローチした後、この問題が、以下の三島の戯曲で現れているさまを確認する。『黒蜥蜴』、『熊野』、『鹿鳴館』である。これらの劇の全てにおいて、現実性に対して嘘を優位に置くという要素が共通していることが見られる。そこでは現実性と虚構は矛盾した関係を持っている。すなわち、これらの劇は、虚構的な行為（演技）を使って現実性を提示しようとしているとされる。これらの劇の三つ目では、別の要素も導入されており、これは三島の人生の終わりに際して決定的となった要素である。つまり、政治の要素である。これは、この作家が彼の最後の最も強烈な行為を実行する際の枠組みとなったであろう。ここで、この自殺の特殊さは、パフォーマティブな舞台化された行為を通じて、三島が極限的形態の真実を見せようとしたという事実のうちにある、ということが主張される。

最後に、三島による行為の概念への接近を、彼の幼少期から、切腹のその日まで簡潔にまとめ、この自殺が、精神分析における行為の概念とどれほど近いものかを考察し、結論としている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

精神分析と文学の関係に関しては、フロイトが精神分析技法の開拓のごく初期から、文学表現の方法論が精神分析過程に類似した道筋で機能するということに驚きつつ着目していることからも分かるように、きわめて密接であることが知られている。この着想の上に多くの文学論が精神分析の概念を活用して書かれてきている。「フロイトへの回帰」を独自の方法論の標語として掲げたジャック・ラカンも、精神分析における精神的過程を説明するために、やはり多くの文学作品を参照することによって成果を残した。翻って文芸批評にラカン派の精神分析の概念を用いることが生産的であることが認められるようになり、特に英語圏の研究者の活動は活発となっている。

日本の作品をその観点から論じたものはまだそれほど多くはなく、ラカン派の観点からの批評は、同時代の作品やポップ・カルチャーに向けられたものが現在のところ大半を占めている。その中にあって、本学位申請論文は、三島由紀夫の作品と人生を正面から扱おうとするものである。申請者の日本語能力は確かなものであり、三島の原典を日本語で読みこなした上で、上記の学問的状況を考慮して、本論文を英語で執筆している。本論文は、父の機能に関連しての「行為」という、三島の作品と人生を考察する上で最も重要な主題の一つを、考察の軸として設定している。

第一章は、方法論的な検討から始められている。文学作品を論じるにあたって精神分析概念を用いることが妥当であるかどうかはまず検討を要する課題であり、本論文はこの手続きを怠らず、三島の作品という事象そのものに即して、精神分析の重要概念が彼の作品群の中に目立った形で現れていることを丁寧に検証した上で、それらの概念を慎重に用いている。ここでは、『仮面の告白』を仲立ちとして、作家の人生とその作品を、内面と外面が入れ替わるメビウスの輪的な構造体として捉えなければならないとしている。

第二章は、三島の代表作の一つ『金閣寺』の考察であるが、従来はともすれば母親との関係に感情的な力点を置いた読解が先行しがちであったところに、本章は、ラカンの「父の名」の概念を導入することによって、テキストをまず構造として捉えて読み進む作業平面を獲得し、その平面を活用して、この小説の筋の運びが、いくつかの「父」の像が機能として次々に現れては去るということによって成り立っていることを浮かび上がらせることに成功し、こうして新鮮な視座を提供しているばかりでなく、この平面においてこそ、故郷や母に対する主人公の感情の歪みもよりよく把握されうるということを示すことができている。そして、この作業平面において小説の進行に従って行き、「父」の謎に引き摺られる主人公の向かう先の必然性を感じ取ることによって、最後の放火という「行為」が、事実としての単なる発病ではなく、作家自身の言うように「生きる」という意志のありようとして理解できるということを、説得的に論じている。

第三章は、主に『太陽と鉄』において作家が開陳している、言語と身体の容易なら

ざる関係を論じたものである。この作品に本論文が与えている重要性は特筆に値する。本章では、第一章における方法論的検討によって得られた、作品と人生の関係への洞察が、言語と身体との関係の考察に生かされて、作家がどのように言葉に囚われてごく早期からの人生を送ってきたか、それがどのように肉体を蝕み、身体性を回復すべく作家がどのような模索をしなければならなかったかということが、ある種の痛ましさを浮かび上がらせる形で、描き出され、作家の内面的苦闘の淵源が、本論文の独特の方法論によって照らされている。本来は、人間にとって現実性を担保する最も優れた契機である身体性の経験が、言葉のあまりの優位のためにその働きを果たせず、作家がこのことに応じて幾つかの外面的には不自然に見える身体に関わる努力を強いられたことが、従来なされてきた説明よりもよりよく理解できるように記述されている。言葉の優位から生じた圧力が、作家をして身体をどのように扱うかについての苦心に至らしめ、精神分析で言えば、「アクティングアウト」的な見せびらかしよりも、「行為への移行」というさらに現実性の強い形式を取らざるを得ないように仕向けた経緯を、本論文は独創性のある仕方で呈示している。

第四章は、第三章における言語の平面の議論をそのまま演劇の舞台へと移行させれば当然出てくる問題、すなわち、言語にとって現実とは何かという問題を扱っている。演劇の舞台は、生身の俳優の動きによって構成されているにも拘わらず虚構の空間として思念されるという逆説によって構成されており、三島の演劇作品はこの逆説を逆手に取り積極的に活用することによって観客に現実的な真理の存在を訴えるという仕掛けを行っている。ハムレットが危機的な場面で仕掛けた劇中劇は、それ自身は一見して細工物であることが分かるようなちゃちな外見を取りつつも、劇中空間に真理を持ち込み劇を大団円へとなだれこませるきっかけを形作っているが、本論文は、三島においてもこうした劇中劇の切迫した使用があり、現実の、本物の、と形容されるような経験が、盛んにその中で問われ探られていることが指摘される。このことにより、本論文は、三島作品の中にある、いわば現実への飢えのようなものを採取しているが、おそらくそれが、三島の劇的な人生の終末へと結びつくような衝迫を用意した当のものではないかという示唆を、本章は与えている。

このように本学位申請論文は、言葉の世界に幽閉された人間が言語作品を通じて現実を回復して生き直そうとする道筋を精神分析の概念を活用して構成したものとして、人間の共生の論理を目指して創設された共生人間学専攻人間社会論講座の理念に叶ったものであり、価値あるものと認める。また、平成 22 年 1 月 14 日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降